慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクスとスターリン
Sub Title	Marx and Stalin
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.4 (1955. 4) ,p.269(1)- 287(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19550401-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

エルンスト・ケルター『黑死病期の十四・五世紀ドイツにおける經濟生活』……渡邊國廣（六一）
『アメリカ自由放任（レセ・フェア）主義の發展』……中村勝己（六六）
ジョルジニ・コニオ『新經濟學教科書に寄せて』……平野絢子（七一）

マルクスとスターリン

氣賀健三

一

ソヴェート連邦の歷史はそのままマルクスの遺言を實行していることになつており、レーニンとスターリンによつて指導されてきた共產黨政府はその遺言執行人であるとみてよいであろう。もつともマルクスはロシアにおいて最初に社會主義革命が成功するとは夢にも考えていなかつたし、また後になつてレーニンが補足したような帝國主義の段階なるものさえ豫知しなかつた。帝國主義の段階が來ることを豫測することもできなかつたし、また資本論におけるその崩潰する運命の豫告より一〇〇年餘を經過した今日に至るまでイギリスが資本主義的命脈を維持していることについては、マルクスの理論的判斷が輕率に過ぎたのかあるいは、革命家的焦慮に誤まられたのか、とにかく或る種の缺陷があつたとみなければなるまい。しかしながら、このような豫測上の誤りは別として、世界の歷史の新しい段階においても依然としてマルクス理論の眞理性は失われることなく、その天才的な後繼者によつて受繼がれかつ發展させられたとみるのが今日の左翼理論家の通念であろう。

マルクスとスターリン

周知の如く、マルクスは資本主義社會の運動法則の分析に最大の努力を拂つたけれども、次に成立する社會主義社會の運動法則については記すところは極めて僅かであつた。したがつてソヴェート連邦の建設と發展の仕事に關する限り、その思想的後繼者たちはマルクスの赤い絲をたよりにして自己の行動を立てると同時に、それを赤い絲によつて是認させることが必要である。けだしもしもソ連の歴史の經過がマルクスの歴史的發展の法則によつて説明されないとすればそれはマルクスが誤つているか、或いはレーニン、スターリンがマルクスより逸脱したことになるからである。もしソ連の歴史がこの法則に合致するならば、それはマルクスの理論が正しいばかりでなく、ソヴェートの指導者が誤つていなかつたことを證明することになるのである。

しかしながら、もしもマルクスの歴史的發展の法則が正しいとすれば、レーニンもスターリンも指導において誤まることはできないのではないかとも考えられる。マルクスの述べたことが正しくて、スターリンのしたことが誤つていたというようなことは考えられないであろう。何故かというに、マルクスの法則は客觀的なそして自然律の如き必然法則であつて、これに背くことのできないものであるから、ソ連の歴史といえども、その例外ではあり得ない。したがつてソ連を指導してきた共産黨の仕事はこの必然の途の一環を歩んだに過ぎないのである。このように解釋することはしかし天才的指導者たるレーニンとスターリンの功績を必ずしも高く評價する所以にならないばかりでなく、積極的な建設における人々の意思と努力との意義に關する懷疑を生み出さずにはおかないであろう。私はかつて唯物辯證法におけるこの問題、すなわち決定論と意思の自由に關する唯物論の矛盾について論じたことがある。[1] ここではマルクスに溯つてその再論を試みるものではないが、スターリンはこれにいかなる解答を用意しているか、をまず問うてみようと思う。

マルクスとエンゲルスの言葉から理解されるかぎり、人間の歴史は自然の歴史と同じように人間の意思にかかわりなく動いていくものである。しかしその歴史の擔い手は人間であつて自然の作用ではない。四季の巡りは人間の意思と全く無關係であるが、人間の歴史は人間が作る。したがつて人々の意思と活動が當然そこに働くのであるが、しかしその作用は決して自由ではない。唯物史觀の説くところの發展法則の貫徹するようにしか作用し得ない。しかも人間の意識、思想、政治活動はすべてみないわゆる上部構造に屬するものであつて、社會の下部構造の反映としてのみ存在する。ただし下部構造と上部構造の間には或る種の相互關係が存在する。上部構造は反映ではあつても、兩者の間に交互作用が成立つが、下部構造の運動の支配性は決定的であるという。かくの如き規定からみれば、上部構造の演ずる役割は歴史の發展の過程においてはむしろ從屬的、二次的であると解すべきであろう。

しかるにスターリンにあつては、この關係はむしろ逆になるかの如き表現を呈する。例えば、彼は共産黨小史の一節において唯物辯證法と史的唯物論を説いているが、そこで思想、理論、政治的見解、政治的機關等の上部構造の起源または發生の仕方の問題と、その意義または歴史における役割とを區別している。それによると上部構造が下部構造の反映であるというのは起源または發生の仕方についての事實の説明であつて、歴史における意義と役割は別個である。それはひとたび發生せる後には「社會の物質」生活の發展、すなわち社會的存在の發展という當面せる任務を徹底的に遂行し、かつその一層の發展を可能にするために必要な諸條件を作り出しつつ、それ自身、社會的存在に、社會の物質生活に影響を與えているという。[2]

たしかに現實の權力的支配者としての立場に立つとき、このような上部構造觀が生まれてくるのは當然であろう。しかしこのような見方は下部構造の決定性を强調したマルクスの反抗の哲學に較べるときは大きな飛躍を意味する。

唯物論的思惟の特徴は、起源が、發生の仕方がその現象の歴史的役割を規定することに存するのであつて、發生と役割とを切りはなして考えることは、およそ唯物論的思惟の本質に背くものである。唯物論の本質は物質が先に存在し、觀念は物質より後に、物質から生まれたことにあると說いたのは外ならぬエンゲルスである。辯證法的發展は物質に內在する矛盾とその統一の過程をふむ發展であり、觀念はその反映であることを主張する。そこに觀念の要因が獨自の能動的要素として活躍する根據は存しないのである。

しかしソ連社會主義を建設するスターリンにとつては、政治的權力とその作用が本質において反映であり、したがつて役割においても從屬的であると見ることは政治的に許しがたいことであると同時に、事實の說明としても承認し難いものがあるであろう。けだしソ連におけるほどマルクス主義思想の統制と動員を國家權力と結びつけて有効に活用する實例をわれわれは未だ他に知らないし、また國家的權力がこの國ほど强く社會の經濟的發展を支配している例をも他に見ないからである。

一九五〇年にスターリンは「言語學におけるマルクス主義について」と題する論文をプラウダ紙上に公表した。この中で彼は上部構造の積極性を說いて次の如くいう。

「上部構造は土臺によつて生み出されるものである。しかしこのことは決して上部構造がたんに土臺を反映するだけであること、上部構造が受動的、中立的で、自分の土臺の運命に對し、階級の運命に對し、體制の性格に對し、無關心な態度をとるものであることを意味しない。それどころか逆に、ひとたびこの世に出現すると上部構造はきわめて大きな能動的な力となり、自分の土臺の形成と强化とに能動的に協力し、新しい體制が古い土臺と古い階級を滅し清算するのを助けるためにあらゆる手段をとる。それ以外ではあり得ない。上部構造が土臺によつて作られるのは、それが土臺に仕えるため、それが土臺の形成され强化するのに能動的に助力するため、……古い土臺と古い上部構造の清算のために能動的に闘うためにつくられるのである。(3)……」

上部構造は能動的に下部構造の形成と强化のために作られるという解釋は、たしかに現實のソ連の社會構造に當てはまるであろうが、マルクスの唯物史觀には當てはまらない。けだし後者にあつては上部構造は下部構造によつて規定されるのであり、下部構造が古いものから新しいものへ移行することは內的な唯物的必然性に基くものであつて、必ずしも上部構造の積極的な能動性を必要としないはずだからである。元來上部構造が下部構造の反映であるかぎり、論理的に考えて、前者が後者の形成に能動性を持つということ自體が矛盾である。或る本體の影にすぎないものが、本體に能動的な影響力を持つとすれば、その力はどこから生ずるのであるか。事實としてこのような影響力を持つているというだけでは說明にならない。むしろかかる事實を認めるとすれば、それは唯物的見解の破綻を告白するものとみるべきであろう。マルクスにあつては、唯物史觀の意圖が主としてその當時の支配的な上部構造の相對的性質や二次的性格を指摘することに存したが故に、この破綻は明白な姿をとつて現われることはなかつたものと考えられる。彼にとつてはいかなる上部構造の紛飾や抵抗にもかかわらず、下部構造それ自體の矛盾の必然、崩潰の避け難いその運命を語ることが肝要であつた。しかるに、スターリンにあつては自ら上部構造の指導者たる地位に立ち、上部構造自體が極めて重要な歴史的役割を演ずることを力說すべき立場に立たされている。二人の間にみられる政治的な境遇のこの相違が唯物史觀の解釋を轉倒せしめたともいい得るであろう。

この意味を最も明白に露わしている例は、一九五二年に公表されたいわゆるスターリン論文にみられる。その中で

スターリンは社會の經濟法則の一つとして「生産關係が生産力にかならず合致する」という經濟法則を提唱している。彼によれば「ソヴェート權力は生産關係が生産力の性格にかならず照應するという經濟法則にもとづいて生産手段を社會化し、これを全人民の所有にすることによつて搾取制度を廢絶し、社會主義經濟形態を創出した。この法則がなく、これにもとづかなかつたならば、ソヴェート權力はその任務をはたし得なかつたであろう」[4]と。ここにいう「經濟法則にもとづいて」というのは、この法則の必然的結果としてという意味ではなく、これを利用または應用したということである。そのことはスターリンがソヴェート權力の特殊な役割として、「國内にはできあいの社會主義經濟の萠芽がなにもなかつたので、いわば「何もない場所に」新しい社會主義經濟形態を創造せねばならなかつた」と述べているところからも推察される。また經濟法則の一つの特殊性として、次のように述べているのもその例證になるであろう。曰く「新しい法則の發見と應用が多かれ少かれ圓滑におこなわれる自然科學の法則とちがつて、經濟の領域では、社會の死滅しつつある諸勢力の利益を侵害する新法則の發見と應用とは、これらの勢力のがわからきわめて強力な抵抗を受ける。したがつてこの抵抗にうちかつことのできる勢力が、社會的勢力が必要なのである。このような勢力は、わが國では社會の壓倒的多數を代表する勞働者階級と農民の同盟という形でみいだされた。他の資本主義諸國ではまだみいだされない」[5]。

すなわちスターリンによれば、生産關係が生産力の性格に必ず照應するという經濟法則は、發見され應用されることによつてその歴史的意味を實現するに至る法則なのであつて、マルクスの唯物史觀における如く、人々の好むと好まざるとにかかわらず貫徹する鐵の如く堅固な自然律ではないのである。

（1）陸氣賀「現代の社會思想」（昭和二九年）

（2）「ソヴェト同盟共産黨歴史小教程一九頁」

（3）「スターリンの勞作『マルクス主義と言語學の諸問題』における辨證法的唯物論と史的唯物論」、コンスタンチーノフ、アレクサンドロフ監修五六七頁

（4）「ソ同盟における社會主義の經濟的諸問題」（民主主義科學者協會譯）二〇頁

（5）同二一頁

二

上部構造と下部構造の關係についてのこの價値の轉換は、ソ連社會の經濟的建設の解釋においても現われてくる。ここではソ連經濟の發展はいかにして行われるかが問題になる。そのさい共産黨政府が立案實施する計畫は發展の法則といかなる關係に立つであろうか。この答えの一つは、計畫そのものがすなわち法則であるとするいわゆる左翼的偏向である。これはスターリン論文の發表前におけるソ連經濟學界の支配的な見解であつた。この見解は必ずしも根據のないものではない。發展は唯物史觀の立場に立つて考えれば一つの客觀的必然であり、必ず貫徹する。ソ連の國家は生産力を擔當する勞働者と農民の代表であるから、正しく物質的生産力發展の要求を反映するはずである。そして計畫化はやはり歴史的必然の一環をなすのであるから、國家の立案實施する計畫化はこの必然を認識して意識的に實踐することに外ならない。かつてのゴスプラン議長ヴォズネセンスキーやオストロビチャンフなどはこの見解の代表的人物である。

例えば曰く「社會主義の經濟法則の最も重要な特性は、それが認識された必然性としてあらわれ、意識的に適用され、また黨及びソヴェート國家の政策を通じて實現されるということである。したがつて黨とソヴェート國家の政策

を外にしては社會主義の經濟法則の實現は不可能である。

黨及びソヴェート國家の政策は認識された社會主義の經濟諸法則にもとづき、經濟の發展を計畫的に推進しかつ組織する力である。

ソヴェート經濟における經濟法則としての力を有する社會主義的計畫化はソヴェート國家の經濟的組織的活動を通じて實現される」[1]と。

これを要するに、いわんと欲するところは國家の政策と法則の一體化である。これに對しスターリン論文は兩者の分離を要求し、兩者の混同を甚だしい誤りとして非難する。スターリンはこの論文の中で社會主義の基本的經濟法則と、國民經濟の計畫的（鈞合のとれた）發展の法則というものを指摘している。前者は生產の不斷の發展によつて國民の物的文化的消費を最大限に保障するという法則である。後者は國民經濟が計畫的な鈞合のとれた發展をするという法則である。ところで經濟法則という以上は、單なる要求や希望或いは何等かの必要條件などを表明するものではなく、社會現象の客觀的過程の反映でなければならない。それはスターリン自身がその論文の冒頭に規定しているところでもある。したがつて上記の法則もソ連經濟の中で實現されているものとみなくてはならない。これに對し計畫はどんな關係に立つであろうか。彼によれば計畫は計畫的發展法則にもとずいて實行される。前者は計畫に對して可能性を與える。これに對し後者すなわち計畫はこの可能性を實現するものであるという。彼はいう「この可能性を現實性に變えるためには、この經濟法則をよく研究し、これを自分のものとし、十分な專門知識をもつてこれを應用することを學び、この法則の要求を完全に反映する計畫を作る必要がある」[2]と。すなわち客觀的な過程を反映しているはずのこの法則はここでは一つの可能性として解せられるに過ぎず、これを現實性に轉化することは計畫作成者の能力にかかつたことなのである。一つの法則が單に可能性に止まるという限りにおいては、ほかにも別の可能性が存在するということを意味するであろう。けだしたつた一つの可能性しかないというのならば、それは可能性の名に値いしないであろう。それではいつたい計畫的發展の法則とは具體的に何を指すのであるか。次のスターリンの言葉がこれに答えるであろう「國民經濟の計畫的發展がしかるべき効果を與えることができるのは、ただある任務があつて、この任務を實現するために國民經濟の計畫的發展がおこなわれるばあいだけである。國民經濟の計畫的發展の法則自體はこの任務をあたえることはできない。國民經濟の計畫化がこの任務をあたえることはなおさらできない。この任務は上に說明した社會主義の基本的經濟法則の要求という形でこの法則にふくまれている」[3]

これを言いかえるならば、ソ連には不斷に生產を高めて國民の消費を最大限に充足する條件が備わつているのであるから、そしてこの任務に合うように計畫的發展の法則が作用することが可能であるから、計畫作製者はこの任務と計畫的發展の法則とをよく反映して計畫を立てなくてはならないというわけである。ここに明かなようにまず任務があつて、この任務が基本的經濟法則という名を與えられている。しかしこれは社會現象の客觀的過程の反映であるという法則の概念に背くものである。スターリンの意圖にもかかわらず任務は計畫者自からが設定するのであり、この設定によつて計畫が立てられる。計畫の實行によつてソ連經濟の計畫的發展が客觀的過程として進んでいく、――ただし共產黨治世の四十年間において不斷の鈞合のとれた發展があつたとはいい難い――設定された計畫が客觀的過程をつくつていくのだとするならば、それは影が本體を作つていくということになるであろう。これはスターリン論文以前に支配していた政策卽法則論を超える背理といわなければならぬ。しかしこの論文の意圖を察するならば、それはむしろ政策卽法則論の行き過ぎを訂正して、政策が恣意的に立てられるものでなくして、一定の客觀的法則にもと

ずかなくてはならないということを注意しようとしたものであろう。しかるにその客觀的法則なるものがスターリンの唯物論的見解では、人間の意思から獨立した必然的な發展法則であるが故に、これにもとずくというのは、とりもなおさず、この法則を意識的に實踐する以外に解しようがないのである。そしてソ連では計畫作製者が計畫によつて發展の歴史を歩みつづけるとするならば、人間の意思から獨立した必然的發展の法則はありようがないのである。

（1）　オストロビチャーフ「社會主義的計畫化と價値法則」ヴァプロシィ・エコノミキ一九四八年第一號
（2）　スターリン論文二一頁
（3）　同上五七頁

三

マルクスと異なつて、スターリン自身が社會の指導者の立場に身を置くことからして生ずるもう一つの興味のある問題は歴史における恒常的な要素の強調である。唯物辯證法と唯物史觀によれば、一切の社會現象は歴史的發展の經過において移り變る。上部構造も下部構造もともに相對的な存在であつて發展し解消し後から來るものにとつて代られる。一切の學問は黨派的であり階級的である。自然科學といえどもその階級性を免かれることはできないはずである。しかるにスターリンによると階級的性質を免がれる社會現象の例がここに一つある。それは言語である。「言語學におけるマルクス主義について」の論文の中で、彼は言語が上部構造にも屬せず下部構造にも屬せず、また文化現象でもなく、同時に階級的でもないことを力説している。それ以前まで、ソ連言語學界の主流はヤコフレウィッチ・マールの影響下にあつた。彼は言語をも他の文化現象と同じく上部構造に屬するものとし、言語學の階級性を比較言語學的に指摘してマルクス主義言語學を確立した功勞者であつた。しかるにスターリンによれば言語は社會の構造の歴史的變遷から獨立していると同時に、階級性を帶びるものでなく、全人民の問題である。それは歴史的一時代の産物でなく、全時代に亙るものであり、一民族の言語でなく、社會の全員に共通の單一言語として生じたものである。

彼の論證の仕方は例えばこうである。「ロシア語は今日ロシア社會の社會主義文化に仕えているのと同じようにロシア資本主義のブルジョア文化にも仕えた」。長い間にはロシア語の語彙に增減があり、意義も變り、文法の組織も變つたが、百年前のロシア語と今のそれとの間に基礎的に、本質的な點全體においては何も變りはない、言語は人間交通の手段として、社會にとつて共通かつ單一であり、社會的地位にかかわりなく社會の成員に平等に仕えるものである。方言や通語は言語ではない。マルクスが「ブルジョアジーの所産」であるといつたブルジョアの言語とは民族語のことでなく、小商人的な語彙で單一の民族語を汚したことを指したのである。語彙の變化は上部構造とちがい、古いものの廢止と新しいものの建設という方法によつてではなく、社會體制の變化、生産の發達、文化科學等の發達につれて生まれた新しい語によつて補うという方法にしたがうのである。言語の發達は現存する言語の基礎的諸要素の發展と改良によつておこなわれる。言語の變化には突發的變異は起らない。新しい質の諸要素の漸次的蓄積と古い質の諸要素の漸次的死滅があるのみである……。(1)

もしもこのような論法で言語と言語の發達を非辯證法的に、そして唯物史觀によらないで說明することが許されるならば、他の數多の文化現象もまた同じように說明することができるであろうし、そしてこれを研究する學問は階級的色彩を拂拭する必要が生ずるであろう。宗教も藝術も技術も、自然科學の知識もさらに多くの社會科學的知識も漸進的な改良と變化發達によつて說明することは容易である。

言語の階級性を否定し、社會の全成員にとつて共通の言語を主張し、全國民的言語の存在を力説するスターリンの意圖はいずこに存するであろうか。彼の意圖の一つが多數異民族を包含するソ連國家の中でロシア語の恒久性と支配性を基礎づけようとしたソ連獨特の民族問題の對策に存することは、この論文の全體を通讀するときに容易に推察することができる。そしてそれよりさらに推測を延長するならば、この方向はスターリン主義の一般的傾向としてソ連のロシア民族を中心とする現制度の絶對化、世界史におけるその中心的役割、ソヴェート愛國主義の昂揚等の一連の傾向につながるものと解しても誤りではないであろう。「スターリン對マルクス」の著者クラウス・メーネルトは、[2] 言語學におけるこのスターリン主義と並べて、歴史學のそれを指摘して、同樣の一連の傾向を論證している。

言語學上のスターリン主義は單一民族語としてのロシア語を是認する。この論文の中で彼は言語の交配を論ずる。交配の結果はどちらの言語とも質的に異つた新たな言語を生むと考えるのは誤りである。實際にはそれらのうちの一つが勝利者となり、それ自身の發達の內的法則にしたがつて發達を續け、他の一方の言語はしだいに自己の格をおとし、しだいに死滅していく。交配に際して生ずる語彙の豐富化は勝つた言語を弱めないで強める。そして曰く「たとえばロシア語においてそうであつた。ロシア語は歴史的發達の過程においていくたの民族の言語と交配し、つねにその勝利者となつた」[3]と。

この最後の言葉はソ連圏內において今後ロシア語が他民族語を支配し、死滅させる役割をはたすことを豫告するものである。言語が民族にとつて極めて重要な文化的財産であり、民族の文化と傳統を維持する最も重要な要素であることはスターリンのみならず何人もよく知るところであろう。スターリンの古い著述「マルクス主義と民族問題」の中には、民族にとつての言語の重要性を認め民族的言語の自由を尊重した言葉が散見する。この書物は民族主義よりも階級闘爭を重くみるマルクス社會主義の立場を說いたものではあるが、同時にロシア國內の地方的民族自治の方向を是認し、その中で少數民族に母語を使う權利、信敎の自由、移動の自由等を許すべきことを說いているのである。さらに革命後一九三〇年の第十六回共產黨大會の演說において、スターリンは「民族問題の分野における偏向について」[4]語り、そこで大ロシア人的ショーヴィニズムへの偏向と地方的民族主義への偏向を戒めている。前者は國內における諸民族の言語・文化・生活樣式等の差異を無視したロシア化の傾向に反對する聲明であり、後者はこのロシア化の勢力に抵抗して自己の民族的團結を固くし反つてソ連邦的全體化より離れようとする孤立化傾向に對する警告である。大ロシア人的ショーヴィニズムといわれる傾向も、スターリンの警告もともにレーニンの言葉を根據にして說かれているが、そのいわんと欲するところを要約するならばこうである。社會主義においては民族的壓迫と障壁が消滅するとレーニンはいつたが、それは現在において民族の單一化、言語の單一化、民族語や民族的文化の廢絶を意味するのでなく、むしろ地方民族文化の興隆、援助を通じて遲れた民族が眞の社會主義建設の事業に參加することを意味する。ただ將來において、社會主義が全世界的規模において勝利を得るに至つて、はじめて諸々の文化が單一の共同の言語を有する單一共同の文化に融合するのである。そのためにも形式において民族的な文化を興隆させなければならない。將來において融合させるために現在諸民族文化を興隆させるというのはいかにも矛盾であるが、これはすなわち辯證法的矛盾であり、國家の死滅に先立つて全世界で最も强力なプロレタリア獨裁國家が發展しているのと同じである。レーニンが民族の分離權をも含む自決權を說き、しかもこれを結合のための分離という公式で表現したのも、同じマルクス辯證法の眞理を反映したものである。そしてスターリンは將來の見透しについて次のように語る。

社會主義が强固なものとなり日常生活にはいつてくる世界的規模における社會主義の時代には、民族語が必然的に單

一共同の言語――これはもちろん大ロシア語でもなければドイツ語でもなく、なにかの新しい言語である――に融合するというレーニンの見解を私は常に支持し、將來もまた支持し續けるであろう」と。一國社會主義の時代において民族文化と民族言語が發展し興隆しつつあるのは、今日現にみられる通りである。この時期において民族語が死滅し單一共同の言語に融合するというのは反マルクス主義反レーニン主義的な謬論である。

以上に概說した一九三〇年のスターリンの意見は明白に一九五〇年の彼の言語學の意見と衝突する。前者では言語の辯證法的發展と分化發展が語られているのに對し、後者ではロシア語の非辯證法的な「發達の內在法則」とその勝利・同化が語られている。兩者の間に存する矛盾をさすがにスターリンは看過してしまうことを許さなかつた。一九五〇年の論文の末尾において「同志ホローポフ」に答えるという書簡形式の論文の中で、二つの見解が決して衝突するものでなく、それぞれ異つた時期について語っていることに注意すれば矛盾はないと辯明している。すなわち言語の交配に關するスターリンの公式は世界的規模における社會主義の勝利までの時期を考慮においているのであり、そこでは國際的に民族的孤立性と相互不信が强められているから、言語の協力と豐富化でなく、或る言語の勝利同化があるのみである。しかるに世界的規模における社會主義の勝利の後には、搾取階級がなくなつて民族の抑壓、不信が取拂われるので民族相互間の協調と信頼がとつて代るから、言語の抑壓と同化の代りに、一つの豐かな地域的言語の下に他の言語が融合して新しい言語が生まれるのであるという。(5)

この辯明が說明として甚だ不十分なことは明白である。一九三〇年の演說においては、決して世界的規模の社會主義實現以後のことだけを述べたのではなく、それに至るまでの民族語をまず論じているのである。しかもソ連邦外の民族語を論じているのではなく、國內の民族語についてその興隆、發達を主張したのである。しかるに一九五〇年の辯明は顧みて他をいうに等しく、論點をそらし遠い夢物語りを說くにすぎない、國內の民族文化と言語については一言の辯明もない。しかもいつともしれぬ未來の時期においてさえ、ロシア語でもドイツ語でもない新しい言語が生まれるという結論は理解しがたい。けだし、それに至るまでの時期において、常にロシア語が勝ち、他の言語が敗けて同化されていくのであるとすれば、その時期が到達したときにはすなわち社會主義が世界的規模で實現されたときには、ロシア語だけが勝利者として殘存すると推察されるからである。そこにはロシア語でない何か新らしい單一の民族語が生まれる餘地は極めて乏しいであろう。(6)

(1) 「マルクス主義と言語學の諸問題」一九五〇年六月二十日付のプラウダ紙上に發表され、それから數回に亘り質問書に對するスターリン署名の回答が同新聞紙上に載せられた。邦譯「マルクス主義と言語學の諸問題における辨證法的唯物論と史的唯物論」（大月書店刊一九五二年）五六八――五七三頁、五八四頁參照

(2) Klaus Mehnert "Stalin versus Marx" 一九五一年

(3) 「言語學の諸問題」五八七頁

(4) 外務省調査部資料に據る

(5) 「言語學の諸問題」六〇七―八頁參照

(6) なおついでに記すならばスターリンは、革命前の著述「社會民主黨は民族問題をどう理解するか」（一九〇四年）「マルクス主義と民族問題」（一九一三年）についても見られる如く、少數民族の權利を擁護する指導者であつた。その見解は一九三〇年の第十六回共產黨大會の演說にも見られたし、さらに一九三四年の第十七回黨大會の演說の中にもみられた。その中で民族主義の偏向は、大ロシア人的民族主義であろうと、地方的民族主義であろうといずれへの偏向も「ソヴェート制度を顚覆し資本主義を復活せしめんとする「その」「民族の」ブルジョワジーの企圖を反映するものである」と斷じている。しかるに今次の戰爭後の過程において、いつの間にかこの見解は徹回せられ、ロシア民族中心の統一國家論に遷り變っている。一九四五年版の共產黨小史は「ソヴィエト國民なかんずくソヴィエト運邦に加盟しているすべての民族のうちで最優秀な民族であるロシア民族の偉勳はわが國に勝利をもたらした」と說き、一九五四年にウクライナとロシアの再合同三百年祭が營まれたとき、ソ連共產黨

承認のテーゼが各新聞紙上に掲載された。その中にはくりかえして、「偉大なロシア民族」「多民族ソヴィエト國家のすべての平等な民族の中における嚮導的なロシア民族」が謳歌されている。そしてウクライナがファシストの侵略から解放されたのは偏えに偉大なロシア民族の援助の故であると說かれる。これに關連して興味のあることはベリア抹殺の理由の一つが彼の反ロシア民族主義偏向にあるのではないかと考えられることである。すなわち彼の追放直後の新聞雜誌の記事の中に、彼がソ連の兄弟的諸民族間の友好を破壞しようとしたと斷じたものが多く、それによるとウクライナ民族ばかりでなく、すべての他の諸民族は偉大なロシア民族の指導と援助に對する愛と尊敬を彼によつて搖がされることはないと强調されている。（外務省「調査月報」一九八號による）

四

歷史における恒久的要素は、ロシア語とロシア人によつて代表されるけれども、今後の發展における恒久的要素は何によつて代表されるであろうか。スターリンの答は明白で容易である、すなわち現在のソヴェート國家權力がそれである。

國家はマルクス主義にしたがう限り、階級的抑壓の道具であつて、階級のない社會では解消するはずである。すでに社會主義の段階を經過したソ連では、階級的對立がなくなつてプロレタリア獨裁の期間も經過してしまつたはずであるが、國外において階級の敵が包圍している限り、國家を解消することができないという理由で、極めて强力な共產黨專制の國家が存續している。そうだとすれば、國家は對外的な意味においてのみその生命と役割を有するに過ぎないのであるが、近年のスターリン主義は國內における社會主義發展においても國家が決定的な主要な役割を演じていることを力說する。事實の問題として國內の生產力の發展にせよ、生產關係の形成にせよソ連國家權力の指揮に依存しないものは一つもないのであるから、スターリンのこの見解はその限りにおいて何等あやしむに足りないであろう。しかし、これはマルクス的唯物史觀の論理に合致した現象ではなく、それによつては說明し難い事實であろう。

國家權力の恒久的な使命を思わせるスターリン主義の獨特の見解は、ソ連國內の物質的生產力の發展が今後において「上からの革命」によつて行われるという新らしいスターリンの公式において甚だ明白に表明される。さきに引用したごとく、彼は言語の發達が突發的變異によらないことを說いたが、それは敵對階級に分れていない社會において、上部構造についてもいえることであるとする。例えばソ連における農業のコルホーズ化は古いブルジョア體制を淸算して新しい社會主義體制をつくり出した革命であるが、これは漸次的移行によつて實現されたのであり、それが成功したのは「上からの革命であり、變革が現政權の發意により、基本的農民大衆の支持のもとに行われたからである」[1]と述べている。上からの革命でしかもそれが基本的農民大衆の支持を得た漸次的移行であるというのはいささか不可解の言ではないであろうか。一九五二年のスターリン論文には社會主義社會から共產主義社會の移行を說いた文章があり、その中にも上記の論法に類似する議論がある。生產力と生產關係の間に矛盾が起るという命題は社會主義にももちろん當てはまるとスターリンはいう。社會主義において兩者の矛盾が全くなくなつて、生產關係の自立的役割が消滅し、生產力に吸收されてしまい、生產力の合理的組織化のみが問題になるというような考え方（同志ヤロシェシュの意見）はマルクス主義に對する重大な罪を犯すものである。スターリンにとつては生產關係が社會主義社會において自立的役割を演ずること、ただし、生產力とのその衝突に立至らないうちに適時に照應させる可能性をもつていることが大切である。生產關係は社會主義制度の土臺として必ず存在する。そして社會主義制度の指導機關の任務は「增大していく矛盾を適時にみつけて、生產關係を生產力の成長に適合させることにより、その矛盾を克服する方策を機を逸せず講ずること[2]」にある。彼は共產主義への移行のために「中央權力または何かの他の社會經濟的中心が社會の

利益のために社會的生産の全生産物を掌握することができるようにすること」[3]を必要條件の一つに數えあげている。生産力と生産關係の矛盾を適時にみつけて調整する仕事が指導機關の任務だとすれば、その機關は社會主義社會でも共産主義社會でも必要であろう。しかしスターリンは國家が解消しないとはいわない。世界の大多數の國で社會主義の活動範圍が擴大するにつれて國家は死滅する。しかしそのとき財産は國家の所有にせよ個人または集團の所有にせよすべて全人民的所有（國有）の繼承者として、「中央の指導的經濟機關によつて代表される社會」[4]に引繼がれる。

このような考え方が權力者としてのスターリンの立場から主張されることには、政治的に解釋すれば何のふしぎもないであろう。これを唯物辯證法的に辯明すれば、生産手段の私有がなく階級對立のない社會段階では敵對的對立がないのであるから、革命も起らないのだといえるであろう。また社會の發展法則を知つてこれを意識的に利用する者にとつては、上からの革命が漸次的移行の形に變轉化するのかもしれない。

けれども、元來マルクスの辯證法の教えるところによれば、發展の過程は辯證法的でなければならないし、質的な變化は必ず變革であり、進化でなく革命でなければならない。生産關係の上に立つ上部構造は生産關係を反映する以外のものではあり得ない。したがつて生産力と生産關係の間に矛盾が生ずるならば、前者の有力な革命的勢力は、生産の發展の妨害となる後者の勢力と衝突せざるを得ないのである。對立がなくなるという説は辯證法的に考えられない論理であり、したがつて抑壓機關としての國家もそれにしたがつて解消するとは考え難い。しかしもしもマルクスの説にしたがつて階級的對立がなくなるならば、そしてしかもスターリンの説にしたがつて國家が解消することなく、國家權力の支配者が、或いはそれに代る中央權力が自らの發意によつて上からの革命を遂行したり或いは中央權力によつて、生産力を發展させ、中央權力によつて生産關係との矛盾を任意に調節することができるというのであるならば、歴史は唯物的でなく、觀念的に描かれることになるであろう。

（1）「言語學の諸問題」五〇六頁
（2）「スターリン論文」八六頁
（3）同前八五頁
（4）同前一〇八頁